

現代アイスランド語の "John kissed Mary on the cheek" タイプの構文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 現代アイスランド語, 全体と部分の関係, 身体名称, Modern Icelandic, whole-part relation, body part terms 作成者: 入江, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43969

『東京大学言語学論集』17
1998年9月
pp. 263-293
東京大学
人文社会系研究科・文学部
言語学研究室

Tokyo University Linguistics Papers (TULIP) 17
September 1998
pp. 263-293
Department of Linguistics
Graduate School of Humanities and Sociology
Faculty of Letters
The University of Tokyo

現代アイスランド語の“John kissed Mary on the cheek”タイプの構文

The construction “John kissed Mary on the cheek” in Modern Icelandic

入江 浩司

IRIE Koji

現代アイスランド語の“John kissed Mary on the cheek”タイプの構文*

入江 浩司

キーワード: 現代アイスランド語, 全体と部分の関係, 身体名称

要 旨

英語の“John kissed Mary on the cheek”と平行的な現代アイスランド語の構文を扱う。すなわち、他動詞の表す動作の対象の全体を目的語が表し、実際に動作を受ける部分をさらに前置詞句で特定するという構造をもつ文である。このタイプの構文で用いることができる動詞は、これまでの調査で約30見つかっている。本稿ではそれらの動詞をすべて挙げ、他の構文での用法と合わせて検討することにより、動詞の大まかな分類を行う。そして、上述の構文の各構成要素の現れ方を検討する。動詞の意味と前置詞や格の選択に相関があること、目的語が有情物でなければならないこと、感覚のある身体部分が最も適切であること、身体名称の修飾の種類に制限があること、等を論じる。

内 容

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1. はじめに | 6. 全体名詞に関する制約 |
| 2. 関連した構文と、構文の表す意味 | 7. 部分名詞に関する制約 |
| 3. 動詞の分類 | 7.1. 部分名詞の種類 |
| 3.1. グループ I | 7.2. 部分名詞の修飾 |
| 3.1.1. グループ Ia | 7.3. 部分名詞の数 |
| 3.1.2. グループ Ib | 8. おわりに |
| 3.1.3. グループ Ic | 略号一覧 |
| 3.2. グループ II | 参考文献 |
| 4. 再帰表現だけで用いられる動詞 | |
| 5. 動詞の意味的特徴 | |

* 話者として協力して頂いた筑波大学の留学生 Hlér Guðjónsson さんに心からお礼申し上げます。また、東京大学大学院の演習において、本稿のもとになった発表に対して貴重な助言をくださった先生方と大学院生の皆様に感謝致します。

1. はじめに

本稿で扱うのは、英語の “John kissed Mary on the cheek” と平行的な現代アイスランド語の構文である¹。すなわち、目的語の位置に現れる名詞句とその後に現れる前置詞句内の名詞句が、それぞれ同一の指示物の「全体」と「部分」の関係にある、という構造をもつ文である。具体的には次のようなものである²：

- (1) Jón barði Egil í höfuð-ið.³
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in head:ACC-Def⁴
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」
- (2) Jón strauk Agli á baki-nu.
 John:NOM stroked:3sg Egil:DAT on back:DAT-Def
 「ヨウンはエギルの背中をなでた」
- (3) Jón þvoði barni-nu um hendur-nar.
 John:NOM washed:3sg child:DAT-Def over hands:ACC-Def
 「ヨウンは子供の手を洗った」

例文(1)(2)(3)で、前置詞句の部分を省略しても文は成り立つ。この点で、例文(2)(3)の目的語の位置の与格の名詞は、ドイツ語の “Er klopf*t* *ihr* auf die Schulter” という文に現れるような、いわゆる「所有の与格」とは性質が異なる⁵。この構文を便宜上、次のように定式化する：

¹ アイスランド語はゲルマン系の言語のひとつである。形態論的な格は、主格と対格と与格と属格の四つ。単純時制は現在と過去。基本語順は SVO。名詞には、接尾辞定冠詞がついた形（「定形」と呼ぶ）と、そうでない形（「不定形」と呼ぶ）がある。定形名詞はグロスで ‘Def’ と表示する。接尾辞定冠詞は名詞の性（男性・女性・中性）・数（単数・複数）・格にしたがって変化する。不定冠詞はない。アイスランド語の表記は現行の正書法に従うが、必要に応じて形態素の境界をハイフンで表示する。この言語の全体的な記述としては、Einarsson (1945)、Kress (1982) を参照。

² 次のような、目的語が二つ現れる文は、本稿では取り上げない：

- (i) Jón gaf Agli högg í höfuð-ið.
 John:NOM gave:3sg Egil:DAT blow:ACC in head:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの頭に打撃を与えた」

³ Egill（人名・男性）の格変化（単数）：Egill (NOM), Egil (ACC), Agli (DAT), Egils (GEN).

⁴ グロスの英語は、同じ語に対して一貫して同じものをつけるようにした単なるラベルであり、当該の表現の訳としてはふさわしくない場合もある。訳は日本語の訳文を参照のこと。

⁵ アイスランド語の「所有の与格」は、身体名称を含む表現の場合、次の例のように前置詞句内の名詞を修飾する用法には限られる：

(4) 主語 + 動詞 + 全体名詞 + 前置詞 + 部分名詞

この構文の構成要素はそれぞれ、次のような現れ方をする：

- 主語は主格で現れる名詞句で、動詞の表す行為の動作主を表す。
- 動詞は主語と、人称および数の一致を行う。
- 「全体名詞」は、動詞の表す行為の影響を受ける対象全体を表す名詞句で、対格あるいは与格で現れる。格形は、動詞によって異なる。
- 本稿で扱う文に現れる前置詞は、*í* ‘in’ と *á* ‘on’ と *um* ‘around, over’ の3つである⁶。どの前置詞が使えるかは、動詞および「部分名詞」の種類によって異なる。
- 「部分名詞」は対格あるいは与格で現れる名詞句で、「全体名詞」の指示物の「部分」を表し、行為が実際に行われる部位を表す。ほとんどの場合、定形で現れる。

本稿では、(4)の構文で使える動詞について、他の構文での用法と対照することにより、この構文の特質を明らかにする。

ここで本稿の以下の構成について簡単に述べておく。第2節では、本稿で考察の対象とする、(4)の構文と関連した他の構文について説明する。第3節では動詞の分類基準を述べ、それに従

- (i) Anna setur tösku-na um öxl sér.
 Anna:NOM puts bag:ACC-Def around shoulder:ACC Refl:DAT
 「アンナはバッグを自分の肩にかける」(sérは三人称再帰代名詞)

このような与格は成句的表現ないしそれに近い、かなり固まった表現で用いられることが多い。また、再帰表現で現れることが多い。ドイツ語の“Er wäscht dem Kind die Hände”と平行的な表現は、アイスランド語ではできない。

⁶ 本稿で扱う動詞では、この3つのいずれか(二つが可能なものもある)の前置詞を用いて自然な文が作れる。他の前置詞、例えば *undir* ‘under’ (対格・与格支配)、*á milli* ‘between’ (属格支配)なども動詞によっては可能であるが、かなり特殊な状況の描写になることが多く、本稿では挙げない。

í ‘in’ と *á* ‘on’ は、対格ないし与格の名詞句と結びつく。格の使い分けは大まかに言って、動作の向かう方向と捉えられる場合に対格、動作が行われる場所と捉えられる場合に与格である(これは対格と与格の二つの可能性のある前置詞のみに当てはまる記述である)。前置詞 *á* ‘on’ の一般的な用法として、例えば、次の例文を参照：

- (i) Jón leggur bók-ina á borð-ið. 「ヨウンは机の上に本を置く」
 John:NOM lays book:ACC-Def on table:ACC-Def
 (ii) Bók-in liggur á borði-nu. 「本は机の上にある」
 book:NOM-Def lies on table:DAT-Def

前置詞 *um* ‘around, over’ は常に対格の名詞句と結びつき、対象を包み込むような行為や、表面全体にわたるような行為の場合に用いられる。

って動詞とその用法を具体的に提示する。第4節では、再帰表現だけで(4)の構文が用いられる動詞について述べる。第5節から第7節にかけて、(4)の構文で用いられる動詞の意味的特徴と、構文の各構成要素の現われ方について考察する。

2. 関連した構文と、構文の表す意味

これまでの調査では、(4)の構文で用いることのできる動詞はおよそ 30 見つかっている。それぞれの動詞について次節で検討するが、他の構文での用法を検討することで動詞のたまかな分類ができる。前置詞や格の現れ方や、どの構文が可能かということと、動詞の意味が関連していることを5節で論じる。

関連する構文として、次のものを考える：

- (5) 構文 A: S V 全体名詞 prep 部分名詞 (=4)
- 構文 B: S V prep [部分名詞:H 全体名詞:D]
- 構文 C: S V prep 全体名詞
- 構文 D: S V 全体名詞
- 構文 E: S V [部分名詞:H 全体名詞:D]

(構文 B と構文 E の [部分名詞:H 全体名詞:D] というのは、[部分名詞 prep 全体名詞:DAT] ないし [部分名詞 全体名詞:GEN] という構造の、「部分名詞」を主要部 (head) とする名詞句である。以下の例文と注7を参照。)

表1に、全体名詞の格、および前置詞と部分名詞の格の、実際の文に現れるすべての組み合わせを構文ごとに挙げる(動詞番号と具体的な動詞については、3節を参照)。

表1：各構成要素の、可能な組み合わせ

構文	動詞番号	代表的動詞
A: S:NOM V 全体:ACC í 部分:ACC	Ia と Ib 全て, Ic-1,2,4	berja 「殴る」
S:NOM V 全体:ACC á 部分:ACC	Ib-2,5	kyssa 「キスする」
S:NOM V 全体:ACC á 部分:DAT	Ic 全て	kitla 「くすぐる」
S:NOM V 全体:ACC um 部分:ACC	Ia-12	grípa 「つかむ」
S:NOM V 全体:DAT á 部分:ACC	II-1	klappa 「軽くたたく」
S:NOM V 全体:DAT á 部分:DAT	II-1,2	strjúka 「なでる」
S:NOM V 全体:DAT um 部分:ACC	II-2,3,4,5	þvo 「洗う」
B: S:NOM V í 部分:ACC	Ia 全て, Ib-1,2, [?] 3, [?] 4,5, II-1	berja 「殴る」
S:NOM V á 部分:ACC	Ib-2,5, II-1	kyssa 「キスする」
S:NOM V um 部分:ACC	Ia-12	grípa 「つかむ」
C: S:NOM V í 全体:ACC	Ia 全て, [?] Ib-1,2,3,4	berja 「殴る」
S:NOM V á 全体:ACC	[?] Ib-2	slá 「たたく」
S:NOM V um 全体:ACC	Ia-12	grípa 「つかむ」
D: S:NOM V 全体:ACC	I 全て(Ia-10,11 を除く)	berja 「殴る」
S:NOM V 全体:DAT	II 全て	strjúka 「なでる」
E: S:NOM V 部分:ACC	Ia-10,11,Ic-5 以外すべて*	greiða 「櫛でとく」

* グループ II の動詞でも、構文 E では「部分」が対格で現れる。

各構文の具体的な例として、berja 「殴る」 (=Ia-2) という動詞の例文を挙げる：

- (6) a. Jón barði Egil í höfuð-ið. [構文 A]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in head:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」
- b. Jón barði í {höfuð-ið á Agli /höfuð Egils}. [構文 B]
 John:NOM beat:3sg in {head:ACC-Def on Egil:DAT / head:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」
- c. Jón barði í Egil. [構文 C]
 John:NOM beat:3sg in Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを殴った」

d. Jón barði Egil. [構文 D]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを殴った」

e. ?Jón barði {höfuð-ið á Agli /höfuð Egils }.⁷ [構文 E]
 John:NOM beat:3sg {head:ACC-Def on Egil:DAT /head:ACC Egil:GEN}
 「?(ヨウンはエギルの頭を殴った)」

構文 A は本稿の中心として扱う構文であり、この構文が可能な動詞を次節に示す。構文 B、C、D、E に関しては、動詞によって可能性が異なる。構文 E は、対象が生物の場合には一般的に容認可能性が落ちる。これについては後で触れる。

なお、「S V prep 全体名詞 prep 部分名詞」という構文も可能性として考えられるが、いかなる前置詞の組み合わせでも、これが可能な動詞は今のところ見つかっていない：

(7) *Jón barði í Egil í höfuð-ið. (cf. 6)
 John:NOM beat:3sg in Egil:ACC in head:ACC-Def
 「*(ヨウンはエギルの頭を殴った)」

構文 A が使えるのは、全体名詞が生物（有情物）である場合に限られる（例外については後

⁷ { }内の語句は、‘/’で区切られたもののうち、一つを選択することを表す。アイスランド語では「～(持ち主)の～(身体部分)」という場合、部分が全体の表面とみなされるか内部とみなされるかによって、次のような前置詞を用いた表現をとる (cf. Einarsson 1945: 111)：

(i) hönd-in á Agli 「エギルの手」 (ii) augu-n í Agli 「エギルの目」
 hand:NOM-Def on Egil:DAT eyes:NOM-Def in Egil:DAT

これらはごく普通の表現で、特に話し言葉で多用される傾向がある。これが単一の文構成要素を成すことは、例えば次のような、いわゆる分裂文の焦点位置に立つことができることで確かめられる：

(iii) Það var fótur-inn á Agli sem Jón braut.
 it was:3sg foot:NOM-Def on Egil:DAT that John:NOM broke:3sg
 「ヨウンが折ったのは、エギルの足だった」

なお、切り離された身体部分の場合には、前置詞 á ‘on’ や í ‘in’ による表現は不可能であるが、属格による表現は可能である。切り離されていない身体部分の場合には、どちらの表現でも意味に違いはない。使い分けは文体的要因に大きく左右される。高級な文体では属格が好まれる。なお、前置詞を用いた表現は、身体部分だけでなく、物の部分についても使える：

(iv) þak-ið á húsi-nu 「家の屋根」 (v) tré-n í skógi-num 「森の木」
 roof:NOM-Def on house:DAT-Def trees:NOM-Def in forest:DAT-Def

なお、これまでの調査では、構文 B で属格による表現と前置詞を用いた表現とで、容認可能性や意味に差が出ることはない。構文 E で、身体部分が切り離されるような行為の場合は、属格の方がやや適切。

で触れる)。全体名詞が無生物の場合の例文：

- (8) a. *Jón barði bíl-inn í þak-ið. (cf. 6a) [構文 A]
 John:NOM beat:3sg car:ACC-Def in roof:ACC-Def
 「*(ヨウンは車の屋根を殴った)」
- b. Jón barði í {þak-ið á bíl-num / þak bíls-ins }. [構文 B]
 John:NOM beat:3sg in {roof:ACC-Def on car:DAT-Def / roof:ACC car:GEN-Def}
 「ヨウンは車の屋根を殴った)」
- c. Jón barði í bíl-inn. [構文 C]
 John:NOM beat:3sg in car:ACC-Def
 「ヨウンは車を殴った)」
- d. Jón barði bíl-inn. [構文 D]
 John:NOM beat:3sg car:ACC-Def
 「ヨウンは車を殴った)」
- e. Jón barði {þak-ið á bíl-num / þak bíls-ins }. (cf. 6e) [構文 E]
 John:NOM beat:3sg {roof:ACC-Def on car:DAT-Def / roof:ACC car:GEN-Def}
 「ヨウンは車の屋根を殴った)」

構文によって表わされる意味について簡単に述べると⁸、

- a. 構文 A は、物理的な行為が部分名詞の指示する特定の部分に対して行われることを表す。全体名詞は有情物であり、行為の何らかの影響を全体名詞の指示物が総体として受ける、という話し手の解釈が含まれる。ただし、行為の影響は、対象の全体的な変化を起こすような激しいものではない。
- b. 構文 B は、部分名詞が指示する特定の部分に対して行為が行われることを表す。行為の影響を全体名詞の指示物が総体として受けるかどうかには関与しない。行為の影響は、対象の全体的な変化を起こすような激しいものではない。
- c. 構文 C は、全体名詞の指示する対象のある部分（言語表現による特定なし）に対して行為が行われることを表す。行為の影響を全体名詞の指示物が総体として受けるかどうかには関与しない。行為の影響は、対象の全体的な変化を引き起こすような激しいものではない。
- d. 構文 D は、行為が全体名詞の指示物に対して行われることを表す。行為の影響が対象に及ぶ度合は、動詞によって大きく異なる。
- e. 構文 E は、行為が部分名詞の指示物に対して行われることを表す。部分名詞は、無機

⁸ Heine (1997: 163-164) は、構文 A および構文 E と平行的な英語の表現について先行研究の見解をまとめている。Wierzbicka (1979) は、表面上同じに見える構文でも、それによって表わされる意味は言語によって異なり得るという主張をしている。

的な物体と解釈される。行為の影響が対象に及ぶ度合は、動詞によって大きく異なる。(上の記述は、構文 A が可能な動詞に関するもので、それ以外の動詞については、この限りでない⁹。)

構文 A と構文 E には、対象の有生性が関与する。構文によって表わされる意味についてまとめると、表 2 のようになる。

表 2：構文の意味特徴

	対象		動作を受ける 範囲が「部分」	対象に著しい 変化を及ぼす
	有生	無生		
構文 A	+	-	+	-
構文 B	+	+	+	-
構文 C	+	+	+(言語表現なし)	-
構文 D	+	+	動詞による	動詞による
構文 E	?	+	+	動詞による

3. 動詞の分類

この節では構文 A で使うことのできる動詞を挙げるが、全体名詞が対格で現れるもの(グループ I) と与格で現れるもの(グループ II) に大きく分ける。グループ I については、さらに構文 B・C が可能かどうかで細分する。グループ Ia は構文 B・C が両方とも可能なもの、グループ Ib は構文 B・C の一方または両方の容認可能性が落ちるか、一方が不可のもの、グループ Ic は構文 B・C が両方とも不可のものである。なお、グループ II は、一例を除いてすべて構文 B・C が不可能である。構文 D は後で見るように、動詞の語彙的意味によって、構文 A、B、C とは意味あいがかなり異なる場合があるので、ここでの動詞の分類基準としては考慮しない。構文 E は、文脈によって容認可能性が大きく異なるので、これも動詞の分類基準としては用いない。分類の基準をまとめたものが表 3 である。動詞の一覧として本節末に掲げる表 4 も参照のこと。

⁹ 例えば、brjóta「壊す、折る」という動詞は構文 A で用いることができないものであるが、この動詞を構文 E に相当する文で用い、目的語を人間の身体部分にしても不自然ではない (cf. 6e, 8e):

- (i) Jón braut {fót-inn á Agli / fót Egils}.
 John:NOM broke:3sg {foot:ACC-Def on Egil:DAT/ foot:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの足を折った」

表3：動詞分類の基準

動詞グループ	全体名詞の格	構文 B・C
Ia	ACC	+
Ib	ACC	?
Ic	ACC	—
II	DAT	(-)*

* (II-1) klappa 「軽くたたく」のみ構文 B が可能。

以下、グループごとに動詞とその例文を挙げる。

3.1. グループ I

このグループの動詞は、全体名詞が対格で現れるものである。構文 B、C が可能な場合、前置詞とその後の名詞の格は、構文 A と同じものが現れる。

3.1.1. グループ Ia

グループ Ia は、全体名詞が対格で現れ、構文 B・C が両方とも可能なものである。

(Ia-1) höggva 「(斧で) 切る」:

(9) Jón hjó Egil í fót-inn. [構文 A]

John:NOM hewed:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def

「ヨウンはエギルの足に斬りつけた」

(10) Jón hjó í {fót-inn á Agli / fót Egils }. [構文 B]

John:NOM hewed:3sg in {foot:ACC-Def on Egil:DAT / foot:ACC Egil:GEN}

「ヨウンはエギルの足に斬りつけた」

(11) Jón hjó í Egil. [構文 C]

John:NOM hewed:3sg in Egil:ACC

「ヨウンはエギルに斬りつけた」

(12) Jón hjó Egil. [構文 D]

John:NOM hewed:3sg Egil:ACC

「ヨウンはエギルの首をはねた」

(13) ? Jón hjó {fót-inn á Agli / fót Egils }. [構文 E]

John:NOM hewed:3sg {foot:ACC-Def on Egil:DAT / foot:ACC Egil:GEN}

「?(ヨウンはエギルの足を斬った)」

例文(9)と(10)、すなわち構文 A と構文 B には、ほとんど意味の差がない。これは構文 B が可能な動詞ではすべて同じである¹⁰。しかし、まったく同じでないことは、(Ib-1) *lýsa* 「照らす」の項目で検討する。例文(9, 10, 11)は、身体部分を切り落としたかどうかには関係ない(切り落としていないという解釈が普通)が、例文(12)は、首を切り落として殺すことを意味する。例文(13)は、足が単なる物体のように感じられるし、行為の結果、部分が切り離されるような性質の動作を表す動詞では、そもそもこの表現は不自然である。身体部分を切り落とす場合には、次のような表現が適切である：

- (14) *Jón hjó fót-inn undan Agli.*
 John:NOM hewed:3sg foot:ACC-Def from:beneath Egil:DAT
 「ヨウンはエギルの足を切り落とした」

(Ia-2) *berja* 「(激しく) 殴る」：

この動詞については、例文(6)を参照。構文 D は何度も激しく殴ったことを表し、構文 A、B、C は一回殴ったことを表す、というのが最も自然な解釈である。

以下の動詞では、構文 A・B・C によって表わされる意味と構文 D によって表わされる意味との間に、(Ia-1) *höggva* 「(斧で) 切る」や、(Ia-2) *berja* 「(激しく) 殴る」のようにはっきりした違いが常にあるわけではない。以下では、特に注目すべきものだけ構文 D に言及する。構文 B、C、E の現れ方は上の例とほぼ同じであり、特に注目すべき場合のみ例文を挙げる。

(Ia-3) *lemja* 「殴る」：

- (15) *Jón lamdi Egil í höfuð-ið.* [構文 A]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in head:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの頭をなぐった」

(Ia-4) *bíta* 「かむ」：

- (16) *Hundur-inn beit Egil í hend-ina.* [構文 A]
 dog:NOM-Def bit:3sg Egil:ACC in hand:ACC-Def
 「犬はエギルの手にかみついた」

(Ia-5) *stinga* 「刺す」：

- (17) *Jón stakk Egil í maga-nn.* [構文 A]
 John:NOM stabbed:3sg Egil:ACC in stomach:ACC
 「ヨウンはエギルの腹を刺した」

(Ia-6) *skjóta* 「撃つ」：

¹⁰ ただし、(II-1) *klappa* 「軽くたたく」を除く。この動詞は、構文 A と構文 B で前置詞の現れ方が異なり、意味も微妙に違う。詳細は該当箇所述べる。

- (18) Jón skaut Egil í fót-inn. [構文 A]
 John:NOM shot:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの足を撃った」

(Ia-6) skjóta 「撃つ」という動詞を構文 D で使うと、対象を撃ち殺すという解釈が普通である (構文 A では部分を撃つということで、殺すかどうかはわからない)。しかし、以下の (Ia-7) hitta 「命中する」や (Ib-3) hæfa 「狙い撃つ」は、構文 D で用いても対象が死ぬかどうかには関わらない。

(Ia-7) hitta 「(弾丸などが) 命中する」:

- (19) Skot-ið hitti Egil í fót-inn. [構文 A]
 bullet:NOM-Def hit:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def
 「弾はエギルの足に当たった」

(Ia-8) skera 「(薄い刃物で) 切る」:

- (20) Jón skar Egil í kinn-ina. [構文 A]
 John:NOM cut:3sg Egil:ACC in cheek:ACC
 「ヨウンはエギルの頬を切った」

(Ia-9) klípa 「つねる」:

- (21) Jón kleip Egil í kinn-ina. [構文 A]
 John:NOM pinched:3sg Egil:ACC in cheek:ACC
 「ヨウンはエギルの頬をつねった」

(Ia-10) sparka 「蹴る」:

- (22) Jón sparkaði Egil í fót-inn. [構文 A]
 John:NOM kicked:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの足を蹴った」

この動詞と、次の (Ia-11) pikka 「つつく」という動詞の二つは、構文 D が不可能である (構文 E も不可)。すなわち、構文 A 以外では前置詞を介さないで目的語をとることができない動詞である¹¹：

¹¹ ただし、(Ia-10) sparka 「蹴る」では、蹴る対象がボールのように飛んでいく場合、目的語は前置詞を介さない与格で現れる：

- (i) Jón sparkaði bolta-num.
 John:NOM kicked:3sg ball:DAT-Def
 「ヨウンはボールを蹴った (ボールは飛んでいった)」

アイスランド語では、行為の結果、行為の対象が行為者から離れていくような性質の動詞のほとんど

- (23) *Jón sparkaði Egil. [構文 D]
 John:NOM kicked:3sg Egil:ACC
 「*(ヨウンはエギルを蹴った)」

(Ia-11) pikka 「つつく」 :

- (24) Jón pikkaði Egil í hend-ina. [構文 A]
 John:NOM poked:3sg Egil:ACC in hand:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの手をつついた」

この動詞と(Ia-10) sparka 「蹴る」の二つは、構文 D が不可能である (構文 E も不可) :

- (25) *Jón pikkaði Egil. [構文 D]
 John:NOM poked:3sg Egil:ACC
 「*(ヨウンはエギルをつついた)」

(Ia-12) grípa 「つかむ」 :

- (26) Jón greip Egil í hend-ina. [構文 A]
 John:NOM caught:3sg Egil:ACC in hand:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの手をつかんだ」

この動詞では、胴体など比較的大きな身体部分を捉える場合、um ‘around, over’ という前置詞を使う :

- (27) Jón greip Egil um mitti-ð. [構文 A]
 John:NOM caught:3sg Egil:ACC around waist:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの腰を捕まえた」

- (28) Jón greip um {mitti-ð á Agli /mitti Egils}. [構文 B]
 John:NOM caught:3sg around {waist:ACC-Def on Egil:DAT/waist:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの腰を捕まえた」

- (29) Jón greip um Egil. [構文 C]
 John:NOM caught:3sg around Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを捕まえた (胴体など)」

この動詞を構文 A、B、C で使うと、逃げようとするのを捕まえることになるが、構文 D ではかなり意味合いが異なり、落下してくるものを受け止めるという意味になる (構文 E も同様に、構文 E の容認可能性は極めて低い) :

で、目的語が与格で現れる。例: kasta 「投げる」、fleygja 「捨てる」、skjóta 「(弾丸を)撃つ」、hella 「注ぐ」、sá 「(種を)まく」、varpa 「投げる」等。これは一般に、「石で投げる」というような古い具格の用法が広がったものと解釈されている (cf. Kress 1975)。

- (30) Jón greip Egil. [構文 D]
 John:NOM caught:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを受け止めた」

例文(30)は、エギルが屋根から落ちるのを下でヨウンが受け止めたような状況の描写である。

3.1.2. グループ Ib

このグループの動詞は、全体名詞が対格で現れるが、構文 B・C の一方あるいは両方の容認可能性が落ちるか、一方が不可のものである。傾向として、構文 B の方が容認可能性が高い。

(Ib-1) lýsa 「照らす」：

この動詞は、構文 C の容認可能性が落ちる。また、構文 A は対象がまぶしがる、ということが含意されるが、他の構文ではそのようなことは関係ない。

- (31) Jón lýsti Egil í andlit-ið. [構文 A]
 John:NOM illuminated:3sg Egil:ACC in face:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの顔を照らした (エギルは眩しがった)」
- (32) Jón lýsti í {andlit-ið á Agli / andlit Egils}. [構文 B]
 John:NOM illuminated:3sg in {face:ACC-Def on Egil:DAT / face:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの顔を照らした」
- (33)?Jón lýsti í Egil. [構文 C]
 John:NOM illuminated:3sg in Egil:ACC
 「?(ヨウンはエギルを照らした)」
- (34) Jón lýsti Egil. [構文 D]
 John:NOM illuminated:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを照らした」

例文(31)は、エギルが眩しがったことを表す。(32)は、眩しがったかどうかには関係ない。(33)は容認可能性が落ちる。(34)は、エギルの身体全体を単に明るくしたということを表す。構文 A では部分名詞が、顔や目など、光を感じる部分でないと言にくい (構文 B では可能)：

- (35)?Jón lýsti Egil í hend-ina. (cf. 31) [構文 A]
 John:NOM illuminated:3sg Egil:ACC in hand:ACC-Def
 「?(ヨウンはエギルの手を照らした)」
- (36) Jón lýsti í {hend-ina á Agli / hönd Egils}. [構文 B]
 John:NOM illuminated:3sg in {hand:ACC-Def on Egil:DAT / hand:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの手を照らした」

この動詞を構文 E で使うと、絵や写真の人物の身体部分を照らすという解釈が最も適切となる：

- (37) Jón lýsti {andlit-ið á Agli /andlit Egils}. [構文 E]
 John:NOM illuminated:3sg {face:ACC-Def on Egil:DAT / face:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンは（絵や写真の）エギルの顔を照らした」

(Ib-2) slá 「たたく」：

この動詞では、前置詞 í 'in' と並んで á 'on' が使える：

- (38) Jón sló barn-ið á hend-ina. [構文 A]
 John:NOM hit:3sg child:ACC-Def on hand:ACC-Def
 「ヨウンは子供の手をたたいた」

- (39) Jón sló Egil í hend-ina. [構文 A]
 John:NOM hit:3sg Egil:ACC in hand:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの手をたたいた」

例文(38)は、子供が机の上のコップに手をのばそうとするのを平手でばちんとたたくような状況で、(39)の方はやや強く、こぶしでたたくような状況である。どちらの前置詞でも、構文 B は可能であるが、構文 C の容認可能性は落ちる。

(Ib-3) hæfa 「狙いをつけて撃つ、命中する」：

- (40) { Jón / Skot-ið } hæfði Egil í fót-inn. [構文 A]
 {John:NOM / bullet:NOM-Def} aimed3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの足を撃った / 弾はエギルの足に命中した」

この動詞は、人間が主語の場合、狙いをつけて撃つということを表す。弾丸などを主語とすることもできるが、誰かが狙いをつけて撃った弾が命中するということである。この動詞では、構文 B、C の容認可能性が落ちる。

(Ib-4) klóra 「ひっかく」：

- (41) Köttur-inn klóraði Egil í andlit-ið. [構文 A]
 cat:NOM-Def scratched:3sg Egil:ACC in face:ACC-Def
 「猫はエギルの顔をひっかいた」

この動詞では、構文 B、C の容認可能性が落ちる。

(Ib-5) kyssa 「キスする」：

この動詞では、前置詞 í 'in' と á 'on' が使える。使い分けは、身体部位の種類による。最も普通には á を用いるが、手のひらや、ひじの内側など、少し窪んだ部位には í を用いる：

(42) Anna kyssti Egil á hend-ina. [構文 A]

Anna:NOM kissed:3sg Egil:ACC on hand:ACC-Def

「アンナはエギルの手 (の甲) にキスした」

(43) Anna kyssti Egil í lófa-nn. [構文 A]

Anna:NOM kissed:3sg Egil:ACC in palm:ACC-Def

「アンナはエギルの手のひらにキスした」

この動詞では、どちらの前置詞を用いても構文 B は可能であるが、構文 C は不可能である。

3.1.3. グループ Ic

このグループの動詞は、全体名詞が対格で現れ、構文 B、C が不可能なものである。

(Ic-1) kitla 「くすぐる」：

この動詞では、前置詞 í ‘in’ と á ‘on’ が使える。前置詞によって格の出方が異なる。使い分けは、身体部分の種類による。足の裏や鼻などの比較的狭い身体部位のときに í ‘in’(+ACC) を使い、首や背中のような比較的広い部位をくすぐるときに á ‘on’(+DAT) を使うようである。身体部位の敏感さの度合と関連があるのかどうかは、今のところ不明。部分名詞は、髪や爪など、感覚のない身体部分では不可。

(44) Jón kitlaði Egil í il-ina. [構文 A]

John:NOM tickled:3sg Egil:ACC in sole:ACC-Def

「ヨウンはエギルの足の裏をくすぐった」

(45) Jón kitlaði Egil á hálsi-num. [構文 A]

John:NOM tickled:3sg Egil:ACC on neck:DAT-Def

「ヨウンはエギルの首をくすぐった」

(Ic-2) meiða 「傷つける」：

この動詞も、前置詞 í ‘in’(+ACC) と á ‘on’ (+DAT) が使えるが、使い分けは微妙。í ‘in’(+ACC) の方が、すばやい動きがあるように感じられるらしい：

(46) Jón meiddi Egil í fót-inn. [構文 A]

John:NOM injured:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def

「ヨウンはエギルの足を傷つけた」

(47) Jón meiddi Egil á fæti(-num). [構文 A]

John:NOM injured:3sg Egil:ACC on foot:DAT(-Def)

「ヨウンはエギルの足を傷つけた」

なお、(47)では接尾辞定冠詞がない方がよいらしいが、理由は今のところ不明（身体名称を取り替えても現れ方は同じ）。

(Ic-3) skaða 「傷つける」 :

ほぼ同じ意味を表す動詞 (Ic-2) meiða 「傷つける」は、対象が生物でなければならないが、この動詞は構文 D で物を対象にしても使える。前置詞は á 'on' (+DAT) のみが可能 :

(48) Jón skaðaði Egil á höfði-nu. [構文 A]
 John:NOM damaged:3sg Egil:ACC on head:DAT-Def
 「ヨウンはエギルの頭を傷つけた」

(Ic-4) rífa 「引き裂く」 :

この動詞は、前置詞 í 'in'(+ACC)と á 'on' (+DAT) が使えるが、使い分けは微妙。í 'in'(+ACC)の方が、すばやい動きがあるように感じられるらしい :

(49) Hundur-inn reif kind-ina í júgr-ið. [構文 A]
 dog:NOM-Def tore:3sg sheep:ACC in udder:ACC-Def
 「犬は羊の乳房を引き裂いた」

(50) Hundur-inn reif kind-ina á júgr-inu. [構文 A]
 dog:NOM-Def tore:3sg sheep:ACC on udder:DAT-Def
 「犬は羊の乳房を引き裂いた」

(Ic-5) draga 「引っ張って動かす」 :

この動詞では、前置詞 á 'on' (+DAT) のみが可能 :

(51) Jón dró Egil á hári-nu. [構文 A]
 John:NOM dragged:3sg Egil:ACC on hair:DAT-Def
 「ヨウンはエギルの髪をつかんで (エギルを) 引きずった」

この動詞では、構文 E がまったく不可能である (構文 A 以外では前置詞を介さずに目的語をとることができない (Ia-10) sparka 「蹴る」と (Ia-11) pikka 「つつく」を除く他の動詞では、容認可能性はともかく、構文 E が可能ではある) :

(52) *Jón dró hári-ið á Agli. [構文 E]
 John:NOM dragged:3sg hair:ACC-Def on Egil:DAT
 「*(ヨウンはエギルの髪をつかんで引きずった)」

例文(52)を無理に解釈するなら、ヨウンがエギルの頭の上ののっているかつらを引っ張って動かした (エギル自身は動かない) といった状況になる。

3.2. グループ II

このグループの動詞は、全体名詞が与格で現れるものである。例が少ないため、下位分類はしない。なお、グループ II で挙げる動詞の目的語は、生物 (特に人間) の場合に与格、物とみ

なされる場合に対格で現れる (アイスランド語の動詞全体についての一般化ではない)¹²。

(II-1) klappa 「軽くたたく」：

この動詞は、構文 A では前置詞 *á* ‘on’ (+ACC/+DAT) が可能：

- (53) Jón klappaði Agli á {bak-ið / baki-nu}. [構文 A]
 John:NOM patted:3sg Egil:DAT on {back:ACC-Def / back:DAT-Def}
 「ヨウンはエギルの背中を軽くたたいた」

例文(53)では、対格と与格のどちらを用いても、ほとんど意味に差がない。構文 B では、前置詞 *í* ‘in’(+ACC) と *á* ‘on’(+ACC) が使える (グループ I と違い、構文 A の前置詞・格の出方と異なることに注意) が、*á* ‘on’(+ACC) の方がより自然である：

- (54) Jón klappaði { í / á } {bak-ið á Agli / bak Egils}. [構文 B]
 John:NOM patted:3sg { in / on } {back:ACC-Def on Egil:DAT / back:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの背中をたたいた」

例文(53)と(54)では意味合いが異なり、(53)はなぐさめる時のように軽くたたくことで (必ずしもなぐさめる場合とは限らない)、(54)は久しぶりに会った友人に元気かと、多少力をこめてたたくような状況 (厳密な回数性の違いではないが、(53)に比べると、一回ぼんとたたくような状況) である。構文 C は不可。構文 D は、どこかを軽くたたくことを表す (たたき方は(53)と同様)。

(II-2) strjúka 「なでる」：

この動詞は、前置詞 *á* ‘on’ (+DAT) と *um* ‘around, over’(+ACC) が可能。*á* ‘on’ (+DAT) が一般的だが、抱え込むようにしてなでる場合は、*um* ‘around, over’(+ACC) を用いる。構文 B、C は

¹² いちいち例文を挙げないが、次のような違いである。(II-4) þvo 「洗う」の例：

- (i) Jón þvær barni-nu. [構文 D]
 John:NOM washes child:DAT-Def 「ヨウンは子供 (の身体) を洗う」
 (ii) Jón þvær fōt-in.
 John:NOM washes clothes:ACC-Def 「ヨウンは衣服を洗う」

また、グループ II の動詞ではすべて、構文 E で目的語となる身体名称は対格で現れる。(II-3) greiða 「櫛でとく」の例：

- (iii) Jón greiddi {hár-ið á Agli / hár Egils}. [構文 E]
 John:NOM combed:3sg {hair:ACC-Def on Egil:DAT / hair:ACC Egil:GEN}
 「ヨウンはエギルの髪をといた」

なお、目的語が人間の身体部分であるにもかかわらず(iii)が適格であるのは、髪が「物」に近いからである。「手を洗う」などという表現を構文 E で言うと、容認可能性は落ちる。

不可能。構文 D は、どこかをなでるということになる。

(55) Jón strauk Agli á baki-nu. [構文 A]
John:NOM stroked:3sg Egil:DAT on back:DAT-Def
「ヨウンはエギルの背中をなでた」

(56) Jón strauk Agli um axlir-nar. [構文 A]
John:NOM stroked:3sg Egil:DAT around shoulders:ACC-Def
「ヨウンはエギルの肩をなでた」

(II-3) greiða 「櫛でとく」：

この動詞は、前置詞 um ‘around, over’ のみが可能。構文 B、C は不可。構文 D で言っても、通常、髪をとくということを表す。

(57) Jón greiddi Agli um hár-ið. [構文 A]
John:NOM combed:3sg Egil:DAT over hair:ACC-Def
「ヨウンはエギルの髪をとかした」

(II-4) þvo 「洗う」：

この動詞も、前置詞 um ‘around, over’ のみが可能。構文 B、C は不可。構文 D は身体全体を洗うことになる。

(58) Jón þvoði barni-nu um hendur-nar. [構文 A]
John:NOM washed:3sg child:DAT-Def over hands:ACC-Def
「ヨウンは子供の手を洗った」

(II-5) þurrka 「乾かす」：

この動詞も、前置詞 um ‘around, over’ のみが可能。構文 B、C は不可。構文 D は身体全体を拭いて乾かすような状況の描写になる。

(59) Jón þurrkaði barni-nu um hár-ið. [構文 A]
John:NOM dried:3sg child:DAT-Def over hair:ACC-Def
「ヨウンは子供の髪を乾かした」

3 節で扱った動詞について、各構文での構成要素の現れ方をまとめたものが表 4 である。

表4：動詞と、各構文の構成要素の現れ方一覧

動詞 番号	動詞	意味	構文 A 全体+前置詞+部分	構文 B 前置詞+部分	構文 C 前置詞+全体	構文 D 全体	構文 E 部分
Ia-1	höggva	(斧で)切る	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-2	berja	(激しく)殴る	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-3	lemja	殴る	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-4	bíta	かむ	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-5	stinga	刺す	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-6	skjóta	撃つ	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-7	hitta	命中する	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-8	skera	切る	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-9	klípa	つねる	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	ACC	ACC
Ia-10	sparka	蹴る	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	不可	不可
Ia-11	pikka	つつく	ACC + í + ACC	í + ACC	í + ACC	不可	不可
Ia-12	grípa	つかむ	ACC + í + ACC ACC + um + ACC	í + ACC um + ACC	í + ACC um + ACC	ACC	ACC
Ib-1	lýsa	照らす	ACC + í + ACC	í + ACC	?í + ACC	ACC	ACC
Ib-2	slá	たたく	ACC + í + ACC ACC + á + ACC	í + ACC á + ACC	?í + ACC ?á + ACC	ACC	ACC
Ib-3	hæfa	狙い撃つ	ACC + í + ACC	?í + ACC	?í + ACC	ACC	ACC
Ib-4	klóra	ひっかく	ACC + í + ACC	?í + ACC	?í + ACC	ACC	ACC
Ib-5	kyssa	キスする	ACC + í + ACC ACC + á + ACC	í + ACC á + ACC	不可	ACC	ACC
Ic-1	kitla	くすぐる	ACC + í + ACC ACC + á + DAT	不可	不可	ACC	ACC
Ic-2	meiða	傷つける	ACC + í + ACC ACC + á + DAT	不可	不可	ACC	ACC
Ic-3	skaða	傷つける	ACC + á + DAT	不可	不可	ACC	ACC
Ic-4	rífa	引き裂く	ACC + í + ACC ACC + á + DAT	不可	不可	ACC	ACC
Ic-5	draga	引きずる	ACC + á + DAT	不可	不可	ACC	不可
II-1	klappa	軽く叩く	DAT + á + ACC DAT + á + DAT	í + ACC á + ACC	不可	DAT	ACC
II-2	strjúka	なでる	DAT + á + DAT DAT + um + ACC	不可	不可	DAT	ACC
II-3	greiða	櫛でとく	DAT + um + ACC	不可	不可	DAT	ACC
II-4	þvo	洗う	DAT + um + ACC	不可	不可	DAT	ACC
II-5	þurrka	乾かす	DAT + um + ACC	不可	不可	DAT	ACC

注：上の表では動作の対象が生物の場合のみを考慮している。なお、構文 E は全般的に容認可能性が低い（容認可能性は、動詞、部分名詞の性質、文脈によって大きく異なる）。

われるような性質の行為でなければならない¹³。

drepa 「殺す」、brjóta 「壊す、折る」、horfa 「見つめる」、sjá 「見る」、taka 「取る」、halda 「握っている、持っている」、ýta 「押す」といった動詞は、構文 A で用いることはできない。ただし、brjóta 「壊す、折る」という動詞は、fót-brjóta ‘foot-break’ という複合動詞にすると次のような表現が可能¹⁴：

- (63) Jón fót-braut Egil á báðum fótum.
John:NOM foot-broke:3sg Egil:ACC on both:DAT feet:DAT
「ヨウンはエギルの両足を折った」

例文(63)で前置詞句を省略すると、「ヨウンはエギルの足を折った」という意味になる（前置詞句がないのが最も普通の用法）。前置詞句として可能なのは、右足、左足、両足、といった

¹³ 例えば、sleikja 「なめる」という動詞は、構文 A が可能かどうかの境界に位置する動詞である：

- (i) Hundur-inn sleikti andlit-ið á Agli. 「犬はエギルの顔をなめた」 [構文 E]
dog:NOM-Def licked:3sg face:ACC-Def on Egil:DAT
(ii) ?Hundur-inn sleikti Egil í andlit-ið. 「?(犬はエギルの顔をなめた)」 [構文 A]
dog:NOM-Def licked:3sg Egil:ACC in face:ACC-Def

この動詞では、構文 A (ii) も不可能ではないが、構文 E (i) の方がより適切な表現である。ただし、íframan 「顔を」(framan 「前から」) という意味の固定した副詞句を使うと、次のような表現が可能：

- (iii) Hundur-inn sleikti Egil í framan. 「犬はエギルの顔をなめた」
dog:NOM-Def licked:3sg Egil:ACC in:the:face

(iii) は (i) と同程度に適格である。íframan 「顔を」という副詞句の用法の詳細は、今のところ不明。

¹⁴ fót-brjóta +ACC 「ACC の足を折る」の「足」の代わりに、brjóta 「壊す」と共起可能な身体名称であれば、その語幹ないし属格形を ...-brjóta という複合動詞の第一成分とすることができる：nef-brjóta ‘nose-break’, tann-brjóta ‘teeth-break’, handleggs-brjóta ‘arm-break’, kjálka-brjóta ‘jaw-break’ 等。このような複合動詞を生産的に作ることができる動詞は限られているようであり、これまで調べた中で普通に使うことができるものは他に、höggva 「(斧で)切り落とす」(=la-1) という動詞があるだけである：háls-höggva ‘head-hew (behead)’, hand-höggva ‘hand-hew’, fót-höggva ‘leg-hew’ 等。これらの動詞は、目的語が生物でないと使えない（例えば、「机の足を折る」という表現としては使えない）。

なお、König and Haspelmath (1997: 565-566) は、ここで挙げた fót-brjóta 「～の足を折る」と並行的なチュクチ語の動詞の例を、身体名称の抱合の例として挙げ、そのようなタイプの表現はヨーロッパの言語には恐らくないであろうと述べている。しかし、上述のように、アイスランド語にはごく少数ではあるが、身体名称を第一成分として生産的に複合動詞を作れるものがある。

なお、Árni Böðvarsson の辞書 (1983: 106) には、“brjóta e-n á háls ‘break someone:ACC on neck:ACC’ = hálsbrjóta e-n ‘neck-break someone:ACC’ ” という記述があるが、brjóta e-n á háls という表現は、現代語ではまず使わない。

影響が大きい行為である (特に Ia のグループ)、という傾向があると言えよう。構文 B・C の前置詞・格の現れ方を検討すると、前置詞 *í* ‘in’ および *á* ‘on’ の後に現れる格は常に対格であり、構文 B・C の前置詞句が表すのは、動作の向かっていく方向であると言える。

次に、構文 D では動詞の表す行為が対象に与える影響の程度や、行為の行い方にばらつきがあっても、構文 A で用いられることによって、それが一定の方向へ収束することを確認する。

構文 D で、行為の対象が死んだり部分が切り離されたりといった激しい変化が含意される動詞は、構文 A で用いられると、対象に対して何らかの接触があるということまでしか表わさなくなる。(Ia-1) *höggva* 「(斧で) 切る」の例：

(65) *Jón hjó Egil í fót-inn.* (=9) [構文 A]
 John:NOM hewed:3sg Egil:ACC in foot:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの足に斬りつけた」

(66) *Jón hjó Egil.* (=12) [構文 D]
 John:NOM hewed:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルの首をはねた」

例文(66)は首を切って殺したことを表すが、例文(65)は、足を切り落としたかどうかには関与しない。

また、構文 D で、動作の回数性が高いような行為を表す動詞は、構文 A (ただし前置詞・格の組み合わせが *í*+ACC および *á*+ACC の場合) で用いられると、一回的な動作と解釈される傾向がある (構文 B、C の場合も同様)。(Ia-2) *berja* 「(激しく) 殴る」という動詞の例：

(67) *Jón barði Egil í höfuð-ið.* (=6a) [構文 A]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in head:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」

(68) *Jón barði Egil.* (=6d) [構文 D]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを殴った」

例文(68)は何度も激しく殴ったという解釈が普通であるが、例文(67)は一回殴ったという解釈が普通である。ただし、(Ia-11) *pikka* 「つつく」は、構文 A、B、C のいずれで用いても (この動詞は構文 D が不可)、同じところを何度かつつくという解釈が普通であるし、(II-1) *klappa* 「軽くたたく」では、構文 D と構文 A とで動作の回数性に関して (Ia-2) *berja* 「(激しく) 殴る」ほどはっきりした違いはない。

また、構文 D で対象の全体にわたって行われるような行為を表す動詞も、構文 A (構文 B、C も同様) で用いられると、対象の部分に対する行為を表す。(Ib-1) *lýsa* 「照らす」という動詞の例：

(69) Jón lýsti Egil í andlit-ið. (=31) [構文 A]
 John:NOM illuminated:3sg Egil:ACC in face:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの顔を照らした」

(70) Jón lýsti Egil. (=34) [構文 D]
 John:NOM illuminated:3sg Egil:ACC
 「ヨウンはエギルを照らした」

例文(70)は、エギル全体を照らしたことを表すが、例文(69)は顔という部分を照らしたことである。また(70)は、単に全体を明るくしたことを表すが、例文(69)はエギルがまぶしがったことを表す。照らすのは構文 D (70)よりも構文 A (69)の方が部分的と言えるが、エギルが感じる影響という点では、(69)の方が強い。構文 A は、対象が何らかの物理的影響を身体部分に受け、そのために有情物として受けるべき影響を全体として受けているという話し手の判断を反映する。構文 A と同様に部分に対する行為を表す構文でも、構文 B・C は、行為が部分に対して行われるということしか表わさない。

6. 全体名詞に関する制約

すでに述べたように、構文 A と構文 E には有生性が関与する。構文 A が使えるのは、対象が生物（特に人間）の場合にほぼ限定され、構文 E が使えるのは、対象が無生物の場合にほぼ限定される：

(71) a. Jón barði Egil í höfuð-ið. (=6a) [構文 A]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in head:ACC-Def
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」

b. ?Jón barði {höfuð-ið á Agli /höfuð Egils }. (=6e) [構文 E]
 John:NOM beat:3sg {head:ACC-Def on Egil:DAT / head:ACC Egil:GEN}
 「?(ヨウンはエギルの頭を殴った)」

(72) a. *Jón barði bíl-inn í þak-ið. (=8a) [構文 A]
 John:NOM beat:3sg car:ACC-Def in roof:ACC-Def
 「*(ヨウンは車の屋根を殴った)」

b. Jón barði {þak-ið á bíl-num / þak bíls-ins }. (=8e) [構文 E]
 John:NOM beat:3sg {roof:ACC-Def on car:DAT-Def / roof:ACC car:GEN-Def}
 「ヨウンは車の屋根を殴った」

対象が生物であっても、死んでいる場合には、(73d)のように、構文 E を用いてもおかしくない：

(73) a. Anna kyssti Egil á hend-ina. (=42) [構文 A]
 Anna:NOM kissed:3sg Egil:ACC on hand:ACC-Def
 「アンナはエギルの手にキスをした」

- b. ? Anna kyssti hend-ina á Egli.¹⁶ [構文 E]
 Anna:NOM kissed:3sg hand:ACC-Def on Egil:DAT
 「?(アンナはエギルの手にキスをした)」
- c. Anna kyssti látna mann-inn á hend-ina. [構文 A]
 Anna:NOM kissed:3sg dead man:ACC-Def on hand:ACC-Def
 「アンナは死んだ男の手にキスをした)」
- d. Anna kyssti hend-ina á látna manni-num. [構文 E]
 Anna:NOM kissed:3sg hand:ACC-Def on dead man:DAT-Def
 「アンナは死んだ男の手にキスをした)」

構文 A (73c) を用いると動作の対象全体が有情物と感じられ、構文 E (73d) を用いると動作の対象が単なる物の部分のように感じられることに変わりはない。どちらの表現をとるかは、対象をどのように見るかという話し手の判断による。(1b-5) *kyssa* 「キスする」という動詞では、有生性に関わらない構文 B の選択もあるが、構文 B が不可能な動詞では、構文 A か構文 E、つまり有生性に関わる表現しか選択の余地がない(ただし、(1c-5) *draga* 「引きずる」について、以下の議論を参照)。

慣用表現には、全体名詞が無生物であっても構文 A を使うものがある：

- (74) Egill hitti nagla-nn á höfuð-ið. [構文 A]
 Egil:NOM hit:3sg nail:ACC-Def on head:ACC-Def
 「エギルは問題の核心をついた / エギルは釘の頭を打った)」

動詞は (1a-7) *hitta* 「命中する」と同一のものである。「釘の頭を打つ」という文字どおりの意味でも用いることができるが、「問題の核心をつく」という慣用表現として通常用いられるものである。構文 A 以外では、この慣用表現の意味は表せない。

構文 A が使えるのは対象が生物の場合にはほぼ限定されると述べたが、一例だけ、慣用表現ではなく、無生物で構文 A が使える動詞がある。(1c-5) *draga* 「引きずる」という動詞である：

- (75) a. Jón dró Egil á hári-nu. (=51) [構文 A]
 John:NOM dragged:3sg Egil:ACC on hair:DAT-Def
 「ヨウンはエギルの髪をつかんで(エギルを)引きずった)」
- b. Jeppi-nn dró bíl-inn á stuðara-num. [構文 A]
 jeep:NOM-Def dragged:3sg car:ACC-Def on bumper:sg:DAT-Def
 「ジープは車のバンパーを引いて牽引した / ジープはバンパーで車を牽引した)」

¹⁶ アイスランド語では、儀礼的な挨拶のキスであっても、相手が生きている人間である限り、構文 E より構文 A の方が自然である。ただし、窓から突き出した手にキスをするような、特に手だけが焦点となるような文脈では、構文 E (73b) は容認される。構文 E の自然さは動詞によっても大きく異なり、例えば (1c-1) *kitla* 「くすぐる」という動詞では、どのような文脈を考えても、構文 E の容認可能性は極めて低い。

(75b)は無生物で構文 A が使える例であるが、バンパーが車のものかジープのものか、一義的には決らない。(75a)についても、ヨウンが自分の長い髪をエギルにつかませて引っ張ったという解釈が、全く不可能というわけではない。構文 A で *i*+ACC, *á*+ACC という前置詞と格の組み合わせを用いる表現では、前置詞句が表すのは動作の向かう方向であり、前置詞句内の名詞句が表すのが主語ではなく全体名詞の指示物の部分であるということが一義的に決る。それに対して、*á*+DAT, *um*+ACC という前置詞と格の組み合わせを用いる表現では、前置詞句が表すのは動作が行われる場所であり、身体名称が現れた場合は、それが全体名詞と同一指示物の部分であると解釈するのが最も自然ではあるが、一義的に決まるのではない。次の例は、*á*+DAT で、全体名詞とは別物の身体名称(場所と解釈される)が部分名詞の位置に現れたもの:

- (76) Jón strauk Agli á hest-baki. (cf. 55)
 John:NOM stroked:3sg Egil:DAT on horse-back:DAT
 「ヨウンは馬上でエギルをなでた」

7. 部分名詞に関する制約

7.1. 部分名詞の種類

構文 A で、部分名詞として用いることができるのは具体的な身体名称にほぼ限られ、「名声を傷つける」など属性に関する表現は、この構文では言えない。また、多くの場合、身体部分でも、感覚のある身体部分でないと使えない。髪や爪など、感覚のない身体部分でも言えるのは、部分の感覚のあるなしに関わらず、影響が全体名詞に及ぶような動作を表す動詞である。しかし、その場合でも、身体に密着した衣類ぐらいまでしか言えない:

- (77) Jón dró Egil á {hári-nu /kraga-num /?skyrtu-nni /*tösku-nni}.
 John:NOM dragged:3sg Egil:ACC on {hair:DAT-Def /collar:DAT-Def/ ?shirt:DAT-Def/ *bag:DAT-Def}
 「ヨウンはエギルの {髪/襟首/?シャツ/*かばん}をつかんで引きずった」

大まかな傾向として、構文 A の部分名詞としての適切さとして、次のような階層が提示できよう¹⁷:

- (78) 感覚のある身体部分 > 感覚のない身体部分 > 身体に密着した衣類

(78)の左のものほど、使える動詞が多く、また、同じ動詞でも、左の方がより適切な表現となる。ただし、(II-3) *greiða* 「櫛でとく」のように、使える身体名称が髪や髭などに決まっているものもあり、あまり厳密なものではない。

¹⁷ これは角田(1991, 1995)の「所有傾斜」の考え方を参考にしたものである。

7.2. 部分名詞の修飾

これまで、構文 A に相当する他のヨーロッパ語の表現を扱った先行研究で、問題となる表現に現れる身体名称では、形容詞による修飾が非常に制限されていることが指摘されている(例えば、Wierzbicka 1979, Vergnaud and Zubizarreta 1992, König and Haspelmath 1997 など)。ここでは、アイスランド語の構文 A についてのデータを示す。

構文 A では、身体名称は通常、修飾語がつかない定形名詞で現れ、所有代名詞や名詞・代名詞の属格で修飾することはできない¹⁸：

- (79) a. Jón barði mig í { höfuð-ið / *höfuð(-ið) mitt}.¹⁹ [構文 A]
 John:NOM beat:3sg me:ACC in { head:ACC-Def / *head:ACC(-Def) my }
 「ヨウンは私の頭を殴った」
- b. Jón barði Egil í { höfuð-ið / *höfuð hans }. [構文 A]
 John:NOM beat:3sg Egil:ACC in { head:ACC-Def / *head:ACC he:GEN }
 「ヨウンはエギルの頭を殴った」

まれではあるが、構文 A で部分名詞が不定形で現れる場合もある。(Ic-2) *meiða* 「傷つける」の例文(47)、*snúa sig* 「捻挫する」の例文(62)を参照。それ以外の表現では、身体名称を不定形にすると不自然である。

構文 A の部分名詞を形容詞で修飾すると、通常、やや不自然に感じられるが、「右」「左」「両方」といった限定の表現や、形容詞によって表わされる状態と動詞の表す動作の意味的関連が自然と感じられる場合には、形容表現が可能となる²⁰：

¹⁸ 所有代名詞はドイツ語の *mein* 等に相当するもので、形容詞変化をするが、1 人称単数、2 人称単数、3 人称再帰(単複同形)しか形がなく、それ以外の人称・数では代名詞の属格形が使われる。所有代名詞が現れる場合、名詞は通常定形であるが、不定形でもよい。名詞の属格で修飾される名詞は常に不定形で現れる。代名詞の属格で修飾される名詞は定形でも不定形でもよいが、不定形の方が好まれる。これは文体的要因によって大きく異なる。

¹⁹ 次のような、前置詞を用いた表現も不可：

- (i) *Jón barði mig í höfuð-ið á mér. [*(ヨウンは私の頭を殴った)]
 John:NOM beat:3sg me:ACC in head on me:DAT

²⁰ Vergnaud and Zubizarreta (1992: 639)は、次のようなフランス語と英語の例を挙げ、形容詞が *restrictive modifier* として解釈(一方は汚れているが他方は清潔といった対比の解釈)ができる a の表現は可能なのに対して、*unrestrictive modifier* と解釈される b の表現は不可能であると述べている：

- (i) a. Pierre a embrassé les enfants sur la joue *gauche / sale*.
 b. *Pierre a embrassé les enfants sur le nez *sale*.

(80) a. ?Jón þvoði barni-nu um smáar hendur-nar. (cf. 58)

John:NOM washed:3sg child:DAT-Def over small:pl:ACC hands:ACC-Def

「?(ヨウンは子供の小さな手を洗ってやった)」

b. Jón þvoði barni-nu um hægri hönd.²¹

John:NOM washed:3sg child:DAT-Def over right:sg:ACC hand:ACC

「ヨウンは子供の右手を洗ってやった」

c. Jón þvoði barni-nu um skítugar hendur-nar.

John:NOM washed:3sg child:DAT-Def over dirty:pl:ACC hands:ACC-Def

「ヨウンは子供の汚れた手を洗ってやった」

また、アイスランド語では、構文Aで指示詞を用いて、現場で指差しながら次のように言っても、あまり普通ではないが、まったく不可能とは言えないようである：

(81) ? Hundur-inn beit Egil í þennan fót.

dog:NOM-Def bit:3sg Egil:ACC in this:ACC foot:ACC

「?(犬はエギルのこの足にかみついたんだ)」

こうした違いは、修飾成分の情報量の違いということで解釈できるかもしれない²²。構文Aの部分名詞の位置では、属格あるいは所有代名詞による修飾は、すでに動作を受ける対象の全体が特定されている以上、余分な情報である。(81)のような直示的な指示詞を用いて指し示すことは不可能ではないが、あまり自然ではない。形容詞による修飾では、(80c)のように、手が汚れているということは手を洗う状況として常識的に予想される範囲の情報であるが、(80a)のように、手が小さいことと手を洗うことの間には、直接の関係が読み取れない。また、(80b)のような身体部分という範囲内での限定の表現(制限的修飾)であれば適格となる。構文Aの部分名詞は、他の修飾成分のつかない、接尾辞定冠詞がついた形が最も普通の形である。ただし、表現によっては不定形が好まれる場合があり(例文(47)、(62)を参照)、表現として固まっている度合と関連があるのかもしれないが、詳細は今のところ不明である。以上をまとめると、表6のようになる。

(ii) a. John kissed the children on the *left / dirty* cheek.

b. *John kissed the children on the *dirty* nose.

²¹ hægri 「右」、vinstri 「左」といった制限的形容詞の後の名詞は、不定形で現れることが多い。

²² 情報量の違いという解釈は、角田太作教授の指摘に負う。

表6：部分名詞の修飾可能性と情報の余剰性

修飾成分：	属格・ 所有代名詞	指示詞	形容詞 (非制限的)	形容詞 (制限的)	定冠詞 のみ	ゼロ
修飾可能性：	—	?	?~(+)	+	+	(+)~?
情報の余剰性：	大 ←					→ 小

注：(+)は、何らかの条件を満たす少数の例で可能ということを表す。

7.3. 部分名詞の数

ここでは全体名詞が複数の場合、部分名詞の数がどうなるかということを見える。

(82) a. Jón þvoði börnu-num um { *andlit-in* / *andlit-ið* }. [構文A]
 John:NOM washed:3sg children:DAT-Def over { faces:pl:ACC-Def / face:sg:ACC-Def }
 「ヨウンは子供たちの顔を洗ってやった」

b. Jón hreinsaði { *andlit-in* / ? *andlit-ið* } á börnu-num. [[構文E]]
 John:NOM cleaned:3sg { faces:pl:ACC-Def / ? face:sg:ACC-Def } on children:DAT-Def
 「ヨウンは子供たちの顔をきれいにしてやった」

(82a)の構文Aでは、単数形で言っても複数形で言っても、どちらがよりよいとは言えないようである²³。それに対して、構文Eに相当する(82b)では、複数形の方がよい。なお、(82a)の þvo「洗う」という動詞では、構文Eが不適切なので、適切な動詞に変えて(82b)とした。

現段階で言えるのは、構文Aの部分名詞の位置では、数の中和が起り得るということである。これがアイスランド語の数の現象としてどのように位置づけられるのかは、この言語全体を広く検討した上で考察しなければならない。

8. おわりに

いわゆる「譲渡不可能所有」の関わる表現として言及されることの多い“John kissed Mary on the cheek”タイプの構文を、現代アイスランド語について検討した。この構文で使える動詞を集め、他の構文での使われ方も合わせて検討し、文の構成要素の現れ方に注目することによって、動詞の大まかな分類を行った。また各構成要素の現れ方に、さまざまな意味的制約があることも見た。

²³ Vergnaud and Zubizarreta (1992: 638)によると、英語では次のbのような場合には単数形が現れる：

- (i) a. John kissed the children's cheeks.
 b. John kissed the children on the cheek.

略号一覧

ACC:	对格 (accusative)	pl:	複数 (plural)
D:	従属詞 (dependent)	prep:	前置詞 (preposition)
DAT:	与格 (dative)	Refl:	再帰代名詞 (reflexive pronoun)
Def:	接尾辞定冠詞 (definite article)	S:	主語 (subject)
GEN:	属格 (genitive)	sg:	単数 (singular)
H:	主要部 (head)	V:	動詞 (verb)
NOM:	主格 (nominative)	3:	3 人称 (3rd person)

参考文献

- Böðvarsson, Árni. (ed.)
1983 *Íslensk orðabók. [Icelandic dictionary.]* (2nd print.). Reykjavík: Mál og menning [1993⁶].
- Chappell, Hilary, and William McGregor. (eds.)
1995 *The grammar of inalienability: a typological perspective on body part terms and the part-whole relation.* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Dahlstedt, Karl-Hampus. (ed.)
1975 *The Nordic languages and modern linguistics 2.* Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Einarsson, Stefán.
1945 *Icelandic: grammar, texts, glossary.* Baltimore: The Johns Hopkins University Press [1986⁹].
- Feuillet, Jack. (ed.)
1997 *Actance et valence dans les langues de l'Europe.* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Heine, Bernd.
1997 *Possession: cognitive sources, forces, and grammaticalization.* Cambridge University Press.
- König, Ekkehard, and Martin Haspelmath.
1997 "Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe." In: Feuillet (ed.)(1997). pp.525-606.
- Kress, Bruno.
1975 "Zum Verhältnis syntaktischer Strukturen zu Strukturen der objektiven Realität, dargestellt am Isländischen." In: Dahlstedt (ed.) (1975). pp.539-547.
1982 *Isländische Grammatik.* München: Max Hueber Verlag.

角田 太作 / Tsunoda, Tasaku.

1991 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版

1995 “The possession cline in Japanese and other languages.” In: Chappell and McGregor (eds.) (1995). pp.565-630.

Vergnaud, Jean-Roger, and Maria Luisa Zubizarreta.

1992 The definite determiner and the inalienable constructions in French and in English. *Linguistic Inquiry* Vol. 23. pp.595-652.

Wierzbicka, Anna.

1979 Ethno-syntax and the philosophy of grammar. *Studies in Language* 3.3. pp.313-383.

[Reprinted in *The semantics of grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. (1988). pp.169-236.]

The construction “John kissed Mary on the cheek” in Modern Icelandic

IRIE Koji

Keywords: Modern Icelandic, whole-part relation, body part terms

This paper deals with Modern Icelandic sentences in which a part of the object is specified by a prepositional phrase (such as the English sentence “John kissed Mary on the cheek”). There are about 30 verbs which can be used in this type of construction. A classification of these verbs is proposed, taking into consideration their usage in related constructions. The semantic properties of the verbs and those of nouns in the object position are discussed. The body part terms that can be used in this type of construction, the modification they undergo and their grammatical number are also examined.

(いりえ・こうじ 博士課程)